社会的比較方向の決定に及ぼす比較側面への自己評価と感情状態の効果[1)2)]

―― 下方比較理論と選択的プライミングモデルの統合に向けて ――

潮 村 公 弘[3)]・小 市 朋 子[4)]

[問　題]

社会的比較理論（社会的比較過程理論）は，現代社会心理学の基底をなすような中心的な理論のひとつである。しかしその一方で，社会的比較理論は，その当初から必ずしも十分ではない点を指摘されてきた側面を合わせ持つ（eg.. Guiot（1978））。また，社会的比較という研究領域は，現象レベルにおいてさえも未解決の問題を多く残している領域である。すなわち，「人は，誰と，どのような時に比較を行うのか」，「上方比較，下方比較，同レベル比較（same-level comparison）といった比較方向を規定する要因は何か」，そしてそもそも「なぜ比較をするのか」といった基本的な疑問について，一貫した答が得られていないのが現状であるといえる。このような見解は高田（1994）にも見てとれる。高田（1994）は社会的比較理論の枠組みにとらわれずに，自他の比較過程を総合的に捉え直すための基礎作業として，日常事態における社会的比較の実態を探る調査を行っている。

社会的比較にかかわる最も主要な理論のひとつであるウィルスによる下方比較理論（Wills,1981;1991）も，その著名性の一方で，理論の予測とは逆方向の知見が報告されている（例えば，Taylor & Lobel（1989), Wheeler & Miyake（1992））。この下方比較理論では，自尊心や主観的幸福感が低下している場合にはそのさらなる低下を防ぐために，自分よりも劣った，つまり下方に位置する他者との比較を行うとする。例えば，乳ガン患者に対して，自分自身の状況への対処方略（coping）を他者に比べてどう思うかについてインタビューしたところ，自由回答形式の設問において，下方比較が圧倒的に多く行われていることが示されている（Taylor, Wood & Lichtman,1983）。乳房を一部切除した人は全部切除した人と，全部切除した人はガンが他へ転移した人と，既婚の人は未婚の人とという具合に比較を行い，自分はまだ好運な方だと回答していたのである。その一方，Taylor & Lobel（1989）はガン患者についての研究を概観した上で，ガン患者は，彼らの脅威的な環境に打ち勝った者あるいはうまく調節している者と交流すること，もしくはそのような他者の情報を得ることを好み，そのようにできない者を避けると結論づけており，これは下方比較理論

註１）本研究は潮村の指導の下で実施された小市の卒業論文研究をもとにしている。
研究の計画を共同で行った上で，調査・実験の実施および卒業論文化を小市が分担し，再分析・再考察および学術論文化を潮村が分担した。
註２）本稿の草稿に対して，福島 治先生（岩手県立大学）より貴重なコメントをいただいた。記して感謝の意をあらわしたい。
註３）信州大学人文学部
註４）平成９年度信州大学人文学部卒業生

とは相反する知見である。また，日常生活事態における社会的比較の様態を調査法によって検討したWheeler & Miyake（1992）では，被験者はポジティブな感情状態の時に下方比較を，そしてネガティブな感情状態の時に上方比較をより多く行っており，下方比較理論とは逆の結果が得られている。

このような知見の不一致に加えて下方比較は，比較による自己内での心理的過程への影響関係のみならず，対人関係や社会的適応という表出・行動レベルに及ぼす大きな問題性も含み持っている。Wills（1981）が指摘しているように，下方比較には自分より不運な他者と自分を比較するという受動的形態のみならず，能動的形態も存在する。すなわち，他者をおとしめることによって自分より惨めな状態をつくりだし，その上で比較を行うことで主観的幸福感を高めるというものであり，この能動的形態は，事実に基づかない非難・中傷や，社会的偏見，敵意を含んだ攻撃行動，他者・他集団のスケープゴート化といったような非社会的・反社会的な表出行動に結びつく。したがって，偏見的態度を規定するひとつの心理過程として，下方比較理論の研究を位置づけることができる。このような意味でも，社会的比較過程は実証的検討に値する重要な意義をもったテーマである。

「比較直前の感情状態」と「比較方向」の関係性について，下方比較理論による予測とは逆の結果を示す現象を説明するためのモデルとして，Forgasら（1990）による選択的プライミングモデル（selective priming model）を指摘できる。このモデルは，感情認知ネットワーク理論（affect-cognition network theory : Bower, 1981; 1991）に基づき，感情の役割に注目したモデルである。このモデルの概要を示すと，喚起された感情によって，その感情と結びつけられている感情ノードが活性化される。さらにそのさいにこの活性化は，他者に関する概念よりも，自己に関する概念に対してより強くはたらくために，自己に関する処理と他者に関する処理においてその格差が生じるとする。その結果，ネガティブ感情が喚起された場合には，自己に対するネガティブな概念が相対的に強く活性化されるために自己の位置づけが低下し，相対的に他者の位置づけが高くなるがために上方比較がなされることを予測する。また逆に，ポジティブ感情が喚起された場合には，自己に対するポジティブな概念が，他者に対するポジティブな概念に比べて相対的に強く活性化されることによって，自己の位置づけが相対的に高くなることにより下方比較がなされることを予測する。このように，下方比較理論と選択的プライミングモデルは，比較の方向性という点で正反対の予測を導き出す。これら2つの理論・モデル（以後，“モデル”と総称する）については，さらに，下方比較理論が比較を行う主体の動機づけに基礎を置いたモデルと位置づけることができる一方で，選択的プライミングモデルは認知科学的な色彩の強いモデルである。したがって，この両モデル間の関係性は，動機づけ論に立脚するモデルと，認知処理論に立脚するモデルという対比的な位置づけにあると捉えることができる。

この2つの対比的モデルを統合的に理解することを目指して，我々はまず研究1として，日常生活事態における社会的比較の実態についてデータを収集し，その実態の再考を通じてこれらの2つのモデル間の関連について検討するための枠組みを探求することにした。日常生活事態での社会的比較の実態調査をおこなった代表的な研究に，高田（1994），Wheeler & Miyake（1992）がある。本研究では，これらの研究を踏まえた上で，測定方法を改良して調査を実施することにした。

前述のように高田（1994）は，社会的比較過程を総合的に捉え直すための基礎作業として，日常事態における社会的比較の実態を探る調査を行っている。これは，社会的比較を研究者による強制や抑圧のない，自然な状態のもとで測定・探究することを目的としている。この調査研究は，社会的比較過程に関する知見に対して再考をうながすとともにさらなる展開方向を提示した点で評価に値する。しかしながら，測定方法の点では，普段どのような比較を行なっているかについて調査対象者の回想報告を求めたものであり，この回想報告という方法は，社会的比較過程の実態をできるだけ自然な状態の下で測定するという目的に鑑みるならば，大きな問題を抱えている可能性を含み持つものと言える。加えて，比較方向を明らかにするための変数（概念）が含まれていなかった点についても，我々に修正・改良の必要性を感じさせた。

Wheeler & Miyake（1992）では，回想報告がかかえる問題に対する積極的な対処がなされている。そこで採用された測定方法は，一般的に回想報告によるデータにはさまざまなバイアスがつきまとう点を考慮し，できる限りそのような影響を及ぼすことがないように，予め記録用紙を配布しておき，普段の生活のなかで比較を行ったときに随時（それが不可能な場合はできる限り早い段階で）それを記録させるという方法であり，事象随伴自己記録法（event-contingent self-recording method）と呼ばれている[5]。ただし，ここで特筆しておくべき事柄として，Wheeler & Miyake（1992）では，どのような領域についての比較であるかについてのデータは存在しているものの，それぞれの領域が個々の被調査者にとってどのような価値を付与されているかに関するデータは存在していなかった。

既に述べたように，社会的比較にかかわる諸理論は必ずしも社会的比較の実態を十分に予測しえていない。その理由として，これまでの社会的比較研究が，当該の比較側面に対する個々人にとっての意味づけの差異を十分に考慮してこなかったことを指摘できよう。能力，容姿・外見，性格といったような外的な枠組みからとらえた比較側面の意味づけのみならず，その比較側面に対して当人がいだいている主観的な意味づけについても変数化して取り込んでいく必要があると考えられる。

我々は，2つのモデルの統合的検証を実施するためのキー概念として，比較側面（比較領域）に対して個々人がいだいている主観的な位置づけ（主観的な評価）に注目することにした。すなわち，どの側面についての比較であるかということのみならず，その側面が自分にとっていかなる意味をもった領域かという要素の重要性に着目し，その点について自由記述方式で詳細な回答を求めることにした。

（研究1）

［方　法］

（調査対象者）信州大学の学生43名（男子11，女子32名）。年齢は18～24歳。

（調 査 時 期）1996年11月～12月。被調査者はこの期間の内，任意の7日間を選び記録を行った。

註5）もちろん，この方法をもってしても，回想データがかかえる問題点の全てを解決できたとは言えない。しかしながら，実態把握的な目的と共存しうる方法としては，これ以上の選択は現段階では存在しないと考えられる。

（記 録 用 紙）日常生活の中で行われる社会的比較を記録するための記録用紙を，高田（1994）およびWheeler & Miyake（1992）の枠組みを基にしながら作成した。被調査者が記録すべき内容は以下の通りである。

「比較事例の概要」：(a)その比較が「いつ」「どこで」「誰と（どのような関係にある人と）」行われたのか。(b)また，それは「何について」の比較であったのか，比較を行った後「どのような気分がしたのか」について具体的に記録させた。

「比較事例の詳細」：(1)比較相手について選択肢の中から１つを選択させた。選択肢は，「ごく親しい友人」「ふつうの友人」「知り合い」「家族の誰か」「自分自身」「知らない人（周囲の他者）」「架空の人物」「有名人（歌手，俳優など）」（「その他」）であった。

(2)相手の性別（「女」「男」「不明」）。

(3)比較をする直前の感情状態（－3（憂鬱な）～＋3（楽しい））の７件法。

(4)比較を行った側面。選択肢は，「性格」「能力」「容貌・外見」「意見・態度」「生き方」「生活態度」「将来・目指す方向」「行動」「課題の遂行・結果」（「その他」）の中から１つを選択させた。

(5)比較の対象となった側面について，比較相手に比べて被調査者が自分自身をどのように評価しているか。（－3（自分の方が劣っている）～＋3（自分の方が優れている））の７件法。

(6)比較を行った理由（自由記述）。選択形式ではなく自由記述としたのは，既存の理論枠組みにできるだけとらわれずに比較理由について探究しようとしたためである。

(7)比較を行った側面の重要度。1（大して重要ではない）～7（非常に重要な）の７件法。

(8)比較を行った直後の感情。「楽しい」「がっかりした」「安心した」「やる気がでた」「あせった」「満足した」「悔しい」「憂鬱になった」の各項目に対し，1（全く当てはまらない）～7（非常によく当てはまる）の７件法。

(9)比較を行ってから記録用紙に記入するまでに経過した時間について，おおよその時間を記入させた。（比較を行ってから記録するまでに長時間が経過することは望ましくないため，数日前の比較を思い出して記録するなどということが無いようにするためにこの質問項目を設定した。）

（手続き）被調査者に，記録用紙を14枚ずつ封筒に入れて配布した。そのさい，以下のような点について説明を加えた教示文を封筒に添付した。

まず，「社会的比較」という言葉に初めて触れる者も理解できるように，社会的比較という概念についての解説，および社会的比較の具体例について簡単な説明を記載した。また比較の対象とされる側面，比較を行うための理由，比較相手の範囲に関して，その多様な内容について具体的に説明した。さらに，記録を行う上での注意事項として，以下の点について説明した。それらは，「１週間の間毎日，１日につき２つ以上の比較について記録を行うこと」，「記録者自身や比較相手の実名をあげる必要はなく，ありのままの比較について具体的に詳しく記録を行うこと」，「記録は比較を行ったその場ですぐ行うようにし，もし何らかの事情でその場では記録ができない場合にもできるだけ早く記録すること。記録は遅くともその日のうちに記録すること」であった。被調査者が記録を始めてから７日後に記録用紙を回収した。

［結　果］

43名の被験者から551の比較事例が収集された。この研究１では，上記のように社会的比較にかかわる様々な要素についての設問が用意されていた。これまでに論じてきたように，ここで我々が主たる検討対象としているのは，「比較直前の感情状態」と「比較方向」の関係性であった。すなわち下方比較理論では，自尊心や主観的幸福感が低下している時，つまりネガティブな感情状態下において下方比較が行われると予測することに対して，選択的プライミングモデルでは，逆に，ネガティブな感情状態下において上方比較がなされることを，またポジティブな感情状態下において下方比較がなされることを予測していた。ここでは，「比較直前の感情状態」と「比較方向」という２つの変数の関係性に注目しながら，研究２での問題設定に貢献する知見に限定した範囲内で研究１での結果を報告しよう。

まず最初に，この２つの変数間の関連について最も情報を集約した結果として，図１を示す。これは，上方，同レベル，下方の各比較方向ごとに，比較が行われた直前の感情状態の平均値を算出したものである。３つの比較方向は，比較の対象となった側面について比較相手に比べて被調査者が自分自身をどのように評価しているかを尋ねた回答項目(5)（上記の「記録用紙」欄参照）を測度として用いて，－3～－1までを自分より優れた他者と比較を行う上方比較，0を自分と同レベルの（類似した）他者と比較を行う「同レベル比較」，＋1～＋3を自分よりも劣った他者と比較を行なう下方比較とした。また感情状態指標については，上記の回答項目(3)を用いて，ポジティブ感情―ネガティブ感情の１次元で測定し，得点が高いほどポジティブな感情状態をあらわすように得点化されている（図１）。

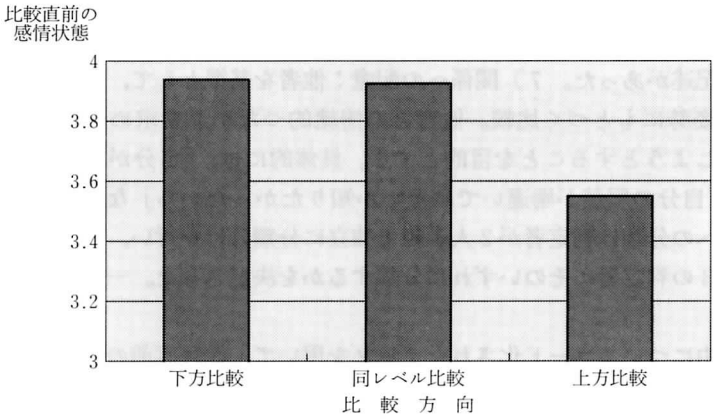

図１　比較方向ごとの比較直前の感情状態

１要因３水準の分散分析の結果，比較方向間で，直前の感情状態に有意な差があることが示された（$F(2,548)=5.14$，$p<.01$；下方比較($M=3.93$)，同レベル比較($M=3.92$)，上方比較($M=3.55$)）。多重比較検定を行ったところ，下方比較と上方比較の間に５％水準で有意差が存在し，同レベル比較と上方比較の間に10％水準での有意な傾向差が認められた。すなわち，下方比較ならびに同レベル比較が行われる場合に比して，上方比較が行われる場合には，その直前の感情状態がネガティブな感情状態にあることを示している。

次に，この関係性が，比較のタイプごとにどのような異同をなしているのかについて検討

する。社会的比較を分類していくさいに，最も中心的な変数は，何のためにそして何を求めて比較を行ったかという比較理由（比較動機）であると考えられよう。本研究の調査票では，できる限り既存の分類枠組みに規定されない形で社会的比較の実態を描き出すことを目指して，この比較理由についても自由記述形式で回答を求めていた。そこでまず，この比較理由についてのコード化を実施し，カテゴリー分類を行った。そのさい，収集された自由記述データの内容と，先行研究での枠組みを参考にしながら，「自己評価」「他者評価」「不確実性の低減」「自己高揚」「自己卑下」「自己改善」「関係への配慮」の７つに分類することとした。以下に各カテゴリーについて簡潔にまとめておこう。１）自己評価：自分の状態（優れている，劣っているなど）が不明瞭である場合に，これをはっきりさせようとする動機。自分の位置を知り，自分についての公正な知識を得ようとすること。２）他者評価：他者の状態への関心。他者の位置を知ろうとすること。具体的には，「相手（の状態）を心配して」や「相手を理解しようとして」といった記述がみられた。３）不確実性の低減：自分のおかれた状況をより明確にするために他者の情報を求める行動。具体的には，「忙しさを確認するため」「自分はこのような状態だが，他の人はどうなのだろうと思って」などの記述がみられた。４）自己高揚：自尊心を高めようとする，もしくは自尊心の低下を防ごうとする動機。具体的には，「自分を慰めるため」「そのような状況にあるのが自分だけではないことを知って安心するため」など。５）自己卑下：自分が劣っていることを（もともとわかっていたのに）確認すること。具体的には「以前からコンプレックスを持っていたので（比較した）」などが報告されていた。６）自己改善：自分を改善しようとする動機。この動機は，「自尊心を高める」という観点から自己高揚に含めて考えられることもあるが，本研究ではこれらを分けて考えた。具体的には，「自分にやる気を起こさせるため」「自分を励まし，勇気づけるため」といった記述があった。７）関係への配慮：他者を基準として，自分を他者に合わせようとする基本姿勢にもとづく比較。他者との情緒的つながりを求めたり，他者と同じ「正しい」行動をしようとすることを目的とする。具体的には，「自分が年相応であるかが気になったから」「自分の服装が場違いではないか知りたかったから」などがみられた。これらのカテゴリーへの分類は判定者が２人１組で独立に分類分けを行い，２人の判断が一致しない場合には第３の判定者にそのいずれに分類するかを決定させた。一致率は84.2％であった。

続いて，比較理由についてコード化されたデータを用いて，比較直前の感情状態のはたらきについて詳しく検討する。比較直前の感情状態がポジティブな感情状態である場合とネガティブな感情状態にある場合ごとに，いかなる比較理由から，上方・同レベル・下方の各比較が行われていたかについてその頻度を算出したところ，図２・図３に示された結果となった。

この結果をもとに，比較理由ごとに「比較直前の感情状態」と「比較方向」の関係に着目して特徴的な関係性が示された点を描写すると次のようになる。

A）「自己卑下」について：ネガティブな感情状態での上方比較において，自己卑下の理由からの比較が特に多く行われていた。

B）「自己改善」について：ポジティブな感情状態での上方比較において，自己改善の理由からの比較が特に多かった。

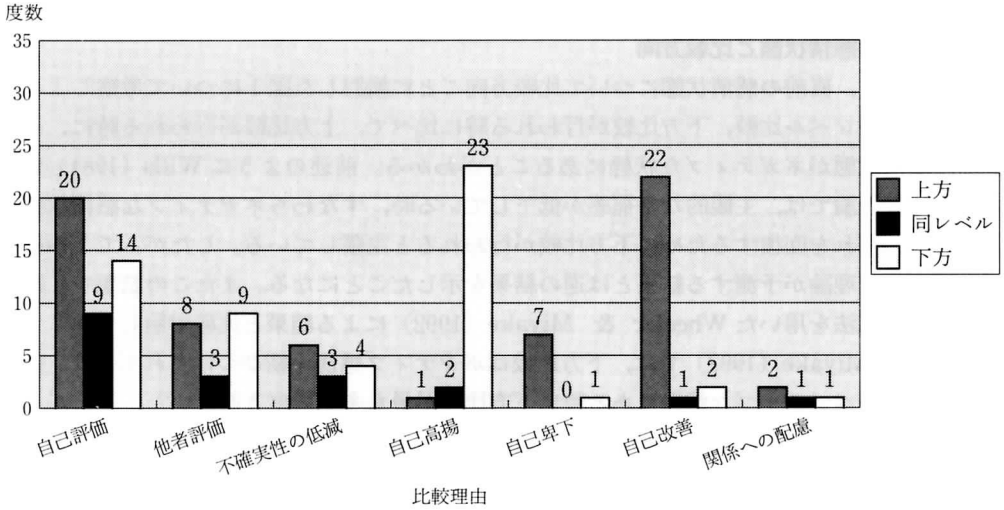

図2　ポジティブ感情状態下での比較理由ごとの比較方向

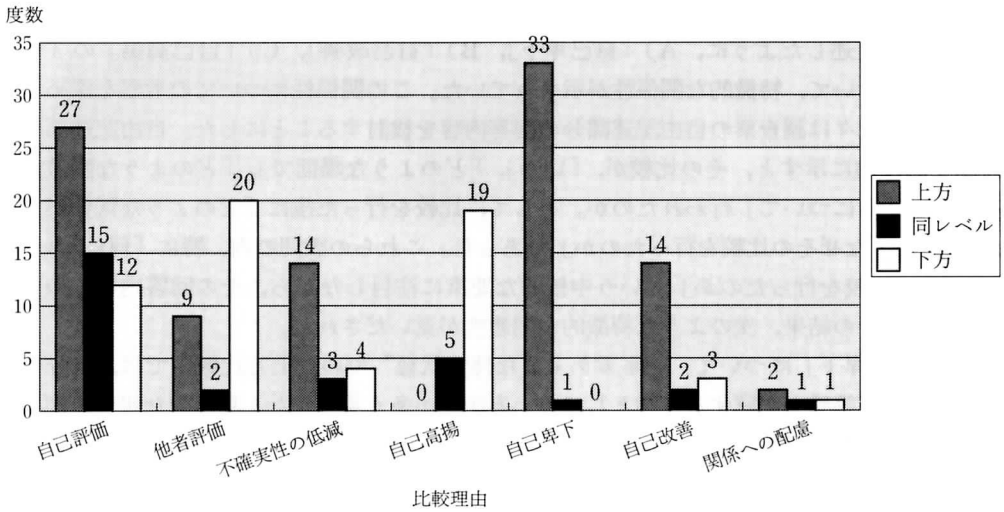

図3　ネガティブ感情状態下での比較理由ごとの比較方向

C）「自己高揚」について：下方比較において，自己高揚の理由からの比較が多く行われていた。そのさい，比較直前の感情状態がポジティブなものであったかネガティブなものであったかによる度数面での違いは認められなかった。

なお，その他の4つの比較理由（「自己評価」「他者評価」「不確実性の低減」「関係への配慮」）については，比較直前の感情状態による差異は，上記3つの比較理由と比べて相対的に小さいものであった。

［考　察］

比較直前の感情状態と比較方向

まず最初に，直前の感情状態について比較方向ごとに検討した図１について考察しよう。図１より，同レベル比較，下方比較が行われる時に比べて，上方比較が行われる時に，その直前の感情状態がネガティブな状態にあることがわかる。前述のようにWills（1981）による下方比較理論では，主観的な幸福感が低下している時，すなわちネガティブな感情状態にある時に，それを回復するために下方比較が行われると主張している。したがってこの結果は，下方比較理論が予測する結果とは逆の結果を示したことになる。またこの結果を，事象随伴自己記録法を用いたWheeler　&　Miyake（1992）による結果と比較対照しておこう。Wheeler & Miyake（1992）では，下方比較はポジティブ感情と結びつけられており，直前の感情状態がポジティブな状態にある時に下方比較が最も多く観察されていた。したがって，本研究１での結果は，Wheeler & Miyake（1992）の結果と一貫した結果であり，これらはともに下方比較理論の予想とは逆の結果をあらわしている。

比較理由ごとの，比較直前の感情状態と比較方向の関係性

次に比較理由ごとに，感情状態と比較方向の関係について検討した図２・図３について考察しよう。上述したように，A）「自己卑下」，B）「自己改善」，C）「自己高揚」の３つの比較理由において，特徴的な関係性が示されていた。この関係性についての考察を深めていくために，我々は調査票の自由記述部分の回答内容を検討することにした。自由記述部分の設問を具体的に示すと，その比較が，「いつ」，「どのような場面で」，「どのような関係にある人と」，「何について」行われたのか。そして，比較を行った後に「どのような気分がしたか」。また「なぜその比較を行ったのか」であった。これらの設問の内，特に「何について」「なぜその比較を行ったのか」という中核的な要素に注目しながら，その回答内容について検討した。その結果，次のような特徴的な関連性が見いだされた。

A）「自己卑下」について　“ネガティブな感情状態”での“上方比較”では，自分のもともとある劣等感を確認する作業としての上方比較が多く見られた。具体的な報告事例を挙げると，「自分の容姿の悪さを確認するため」「以前から指摘されていた欠点を実感するため」という比較理由が指摘されている。

B）「自己改善」について　“ポジティブな感情状態”での“上方比較”については，自分をさらに高めようとする上方比較が多く行われていた。具体的には，「自分よりさらに上がいることを知り，自分を励ますため」「相手を見習い，相手のようになりたかったから」といったものである。

C-1）「自己高揚」について（ポジティブ感情状態下）　“ポジティブな感情状態”における，自己高揚のための“下方比較”については，もともとは自信のなかった側面において良い結果が得られたために，それを実感しようとして行った下方比較が多く報告されていた。具体例を挙げると，「自分自身の仕事能力が以前よりは高くなったことを実感するため」，「珍しく馬券があたり，その運の良さを実感するため」「友人から“痩せた？”と言われ，それを確認するため」などである。

C-2）「自己高揚」について（ネガティブ感情状態下）　“ネガティブな感情状態”にお

ける，自己高揚のための“下方比較”については，もともとは自信のあった側面について，その自信がゆらいできたために下方比較を行うことにより自尊心を保とうとした比較が多かった。具体的には，「自分より太っている人を見て，自分はまだ大丈夫だということを確認したかった」，「自分のレポートはそれほど遅れていないことを確認し，安心したかった」などの比較が報告されていた。

これらの考察から，「比較直前の感情状態」と「比較方向」の関係性に対して，比較をする側面について自分が普段から自信を持っていたかどうかが規定因となっているという仮説枠組みが構築された。すなわち我々が先に比較側面に対する主観的な位置づけに注目することの重要性に言及したことに対応して，本研究1での自由記述部分の回答内容およびそのカテゴリー分類を用いた分析結果から，比較側面に対して個々人がいだいている自信（自信の有無）という変数に着目した。ここで，「比較直前の感情状態」と「比較方向」の関係性に対して相反する予測をなす2つのモデルの統合を目指す仮説枠組みについて，「比較直前の感情状態」と比較次元に対する「自信の有無」が「比較方向」に及ぼす影響という視点から整理しておくと次のようになる。すなわち，ポジティブな感情状態では自信の有る側面についてはさらにその能力を高めようと自分を励ますために「上方比較」が行われ（[B）自己改善に対応]），自信の無い側面についても，それほどひどくはない，実はいい方なのではないかと自信を持たせるために「下方比較」が行われる（[C-1）自己高揚に対応]）。ネガティブな感情状態では自信の有る側面については「下方比較」をすることでゆらいできた自信を何とか保とうとし（[C-2）自己高揚に対応]），自信の無い側面については「上方比較」をすることで自分の劣等感を確かめる比較が行われる（[A）自己卑下に対応]）とする仮説枠組みである（表1）。

表1：比較方向を予測する仮説枠組み

	自信有り	自信無し
ポジティブ感情状態	上方比較	下方比較
ネガティブ感情状態	下方比較	上方比較

（研究2）

[目　的]

研究1では，日常生活事態における社会的比較の様態を，事象随伴自己記録法（event-contingent self-recording method）によって収集した。その調査結果に対して，「比較直前の感情状態」「比較方向」そして「比較理由」という3つの要素の関係性に注目しながら，その報告内容中の自由記述部分に対する考察（中でも特に「比較理由」に対する考察）を進めていくことによって表1に示す仮説枠組みを設定した。ここでは，喚起された感情状態が比較方向を規定する関係性において，当該の比較側面が自分にとって自信が有る側面か否かという要因が媒介的に機能していることを想定した。自信が有るか否か，すなわち比較側面に対する当人のこれまでの自己評価が高いか否かということが，比較直前の感情状態と比較方向との関係性に対して交互作用的に機能することを仮説として設定することによって，下方比較理論と選択的プライミングモデルを統一的に理解・説明しようとする枠組みである。

表1に示した仮説枠組みは，4つの仮説から構成されていると言える。それらの4つの仮説を，下方比較理論と選択的プライミングモデルという2つのモデルとの対応関係に則してあらわすと以下のようになる。なお，これらの4つの仮説のうち，仮説1-1と仮説2-1は選択的プライミングモデルの検証となる仮説であり，一方，仮説1-2は下方比較理論の検証としての位置づけとなる。下方比較理論と選択的プライミングモデルの対比という視点からは，特に，ネガティブな感情状態下での予測（仮説1-1と仮説1-2）において，2つのモデルが直接的に相反する比較方向を予測していることとなる。

仮説1-1（選択的プライミングモデルの検証）；
　ネガティブ感情状態下では，自信の無い側面においては，上方比較が多く行われる。
仮説1-2（下方比較理論の検証）；
　ネガティブ感情状態下では，自信の有る側面においては，下方比較が多く行われる。
仮説2-1（選択的プライミングモデルの検証）；
　ポジティブ感情状態下では，自信の無い側面においては，下方比較が多く行われる。
仮説2-2；
　ポジティブ感情状態下では，自信の有る側面においては，上方比較が多く行われる。

研究2では，架空の「社交性テスト」を実施し，全被験者に対して平均点よりも少し低い得点をフィードバックすることによって自我脅威状況を喚起した上で，この仮説枠組みについて実験的に検証を行う。この検証を実現するための実験計画は2要因（2×2）の実験計画となる。独立変数は，社会的比較事態にさいして「喚起される感情（ポジティブ感情，ネガティブ感情）」×「比較側面に対する自信の有無（自信有り群，自信無し群）」，従属変数は比較方向（3水準：上方比較，同レベル比較，下方比較）となる。

なお本研究では，比較側面に対する自信の有無を，実験操作変数ではなく個人差変数として取り上げた。その理由は，比較側面に対する状態的な自信の有無ではなく特性的な自信の有無を取り上げることを目的としたことによる。ただしそのさい，要求特性への配慮から，比較側面に対する自信の有無を直接的に尋ねることは避けた。代わりに，当該の比較側面に関するパーソナリティ尺度での得点を用いて代替させることにした。すなわち，高得点者はそれだけ当該側面に対して自信をもっているとして処理されることになる[6]。また本実験設定では，被験者が比較を行う側面として「社交性」次元を取り上げることにした。これは山本・松井・山成（1986）による自己認知の11側面に含まれており，また，高田（1993）の調査から，日本人大学生において同年代他者との比較が頻繁に行われる側面であることが見い出されていることによる。それゆえに以降では，比較側面に対する自信の有無を，社交性の有無としてあらわすこととする。また，感情喚起操作については，対人関係上の出来事（対人関係で嫌な思いをした出来事，もしくは対人関係で嬉しい思いをした出来事）の想起を求めるという課題とすることで，社交性次元と関連のある次元上で感情喚起の操作がなされるようにした。

註6）パーソナリティ尺度は，自記式でかつ回答者の主観的な判断によって回答される。したがって，パーソナリティ尺度得点の高低が自信の有無を反映していると考えることは妥当な選択肢のひとつと考えられる。

［方　法］

（被験者）信州大学の学生60名（男性16，女性44名）。年齢は18～27歳（ただし平均年齢は20.0歳）。

［手続き］実験は被験者1人～3人までを一単位として行われた（複数の被験者に対して実験を行うときには被験者の間についたてをおき，互いの回答や得点が見えないようにした）。

実験の表向きの目的として，これから受けてもらうテストは米国での研究をもとに20代前半の社会人を対象に作成された「職場での人間関係に対する適性テスト」であり，この実験では学生を対象として，学生が将来，社会に出たときの人間関係への適性テストを作成するために学生のデータを収集していると告げた。このテストで高得点の人は実際に職場への適応性が高く，人間関係上のストレスに強いと言われていることもあわせて説明した。さらに，テストは2段階からなっており，「テスト1」はペーパーテスト，「テスト2」は実際のコミュニケーション場面でのテストであること。また「テスト1」は全員に同じものを受けてもらうが，「テスト2」には難易度によって3つのレベルがあるので，「テスト1」の得点を参考として自分に最もふさわしいレベルを選ぶようにと教示した。

「テスト1」終了後，「テスト2」でのレベルを被験者に選択してもらうために「テスト1」の得点が必要であること，そのためにこの場でこれから採点を行うことを被験者に告げた。採点には多少時間がかかるため，待っている間に「大学院生が行っている調査」への協力を依頼した。他者による別研究であるという点はカバーストーリーであり，この調査は実際には感情状態操作である。採点を行っている間，約15分ほどで調査用紙への記入をするよう求めた。被験者が「別研究に回答している」間に，実験者は「テスト1」の採点を行うようによそおった。実験者は被験者全員のフィードバックシートに（実際の被験者の回答内容にはかかわらず）「100点満点中59点」という得点を記入して被験者に手渡した。そのさい，「平均点は全部のデータを収集してから算出するが，だいたい65点前後だと思われる」ことを告げ，「100点満点中59点」という成績についてどう思うか（とても悪いと思う(1)～とてもいいと思う(7)），満足しているか（非常に不満だ(1)～非常に満足だ(7)）について評定を求めた。

続いて「テスト2」について次のような説明を行った。「テスト2」は実際のコミュニケーションである。初対面の人と5分間会話をしてもらうが，相手は，人間関係についての悩みを持っているので，その悩みを聞き，アドバイスを与えることが課題である。また，コミュニケーション場面はビデオで撮影し，後ほど採点する，ということを被験者に伝えた。さらに，このテストには難易度によって3つのレベルがあるので，どのレベルのテストを受けるかを選んで欲しい，そのさい，参考とするために自分自身の「テスト1」での得点の他に，他者の回答をひとり分だけ見ることができることを告げた。このテストは先に別の地方国立大学でも行われており，その時の答案を7人分入手することができたので，このうちひとり分の回答を見せていると説明し，回答を見たい相手をひとりだけを選ばせた。選択肢は，A（82点）・B（76点）・C（68点）・D（60点）・E（52点）・F（45点）・G（39点）の7人であった。また，その他者の回答をどの程度見たいと思うかについて7件法（知りたくない(1)～どちらでもない(4)～知りたい(7)）で評定させた。

この質問紙を回収後，改めて，なぜその人の回答を見たいと思ったのかについて自由記述

形式と尺度評定形式で尋ねた。尺度評定形式では，「自分の成績についての公正な知識を得るため」「自分の成績はそれほど悪くはないことを知るため」「自分を向上させ，より高い得点を目指すため」「自分の成績の悪さを自覚するため」「自分の成績が不明確で不安だったから」「自分より成績の悪い人もいることを知りたかったから」の6項目について，5件法（全くあてはまらない(1)〜とてもよくあてはまる(5)）で回答するように求めた。質問紙回収後，「テスト2」は行わずこの実験はこれで終了であることを告げ，ディブリーフィングを実施して実験を終了した。

ここで「テスト1」と「感情状態操作」についてさらに詳しく記載しておく必要があるだろう。「テスト1」では，“適性テスト”に対する被験者の信頼感を高めるために多様な側面からなる設問群（以下の3つの設問群）によって構成されるように配慮した。問1では，パーソナリティ特性項目スタイルの25の項目のうち8項目が，被験者の社交性得点を算出し，実験変数化を行うための項目群であった。このうち5項目はCheek & Buss（1981）による社交性尺度である。残りの3項目は社会的スキルを測定するための「人当たりの良さ尺度」（堀毛，1994）から採用した。問2では，対処に迷うような13の社会的状況を文章記述によって提示し，それぞれの状況で自分ならばどのように行動するかについて，3つの選択肢の中からひとつを選ばせるという問題であった。問3ではまず，これから相互作用を行う相手およびその状況を描写した写真刺激を呈示し，当該状況において最も円滑にコミュニケーションを進めていくためにどのような発話・会話をするかについて自由記述形式で回答させた。

感情操作課題では，上述のように「大学院生による調査研究」として，「大学生の友人関係に関する調査」と題する課題を（「テスト1」の採点を待つ間に）被験者に行わせた。これは，ネガティブもしくはポジティブな感情状態を人為的に喚起するための操作で，ネガティブ感情喚起条件では「最近対人関係で嫌な思いをしたこと」，ポジティブ感情喚起条件では「最近対人関係で嬉しい思いをしたこと」について，具体的な出来事2つについて記述させた。それぞれの出来事について，その時の状況・相手との関係・その時どのように思ったか・その後の生活や相手との関係にどのような影響があったか，についてできるだけ詳しく具体的に自由記述するように求めた。さらに，この調査票での最後の設問として，20の形容詞の中から今の気分にあてはまるものを全て選ばせることで操作チェックとした。

［結　果］

感情喚起の操作チェック

感情喚起操作後の被験者の感情状態を測定するために，被験者は20の形容詞（ポジティブな感情を表す形容詞10個，ネガティブな感情を表す形容詞10個）の内から現在の気分にあてはまるものを全て選ぶように求められた。実験操作が十分であったか否かを確認するために，選択されたポジティブ形容詞数を従属変数とした t 検定と，選択されたネガティブ形容詞数を従属変数とした t 検定（ともにポジティブ感情喚起群とネガティブ感情喚起群で比較）を実施した。

その結果，ポジティブ形容詞数についての t 検定では，ポジティブ感情喚起条件の方がネガティブ感情喚起条件に比べて選択された語数が有意に多かった（$t(58)=4.51$，$p<.01$（ポジティブ感情喚起群：$M=3.00$），ネガティブ感情喚起群：$M=1.23$）。また，

ネガティブ形容詞数については，t 検定の結果，ネガティブ感情喚起群の方がポジティブ感情喚起群に比べて選択された語数が有意に多いことが示された（$t(42.84)=5.71$，$p<.01$（ネガティブ感情喚起群：$M=2.73$，ポジティブ感情喚起群：$M=0.57$）。それゆえにいずれの指標においても，操作された感情喚起条件に沿うかたちで被験者に対する感情喚起がなされていたことが確認された。

社交性高群・低群の変数化

社交性を測定する項目として設定した8項目（5件法）のそれぞれについて，「全くあてはまらない」(1点）～「とてもよくあてはまる」(5点）として得点化し，その合計得点をもって各被験者の社交性得点とした。

まず，この社交性得点について分布の様態を検討したところ，特に分布に歪みは認められなかった（歪度（skewness）＝－.043)。さらに，この社交性得点について，ポジティブ感情喚起群とネガティブ感情喚起群との間で t 検定を行なったところ，条件間に有意差は認められなかった（$t(58)=1.11$，$n.s.$；ポジティブ感情喚起群：$M=27.00$，ネガティブ感情喚起群：$M=25.33$)。すなわち，社交性についての自己評定得点は，感情喚起操作による影響を受けなかったと判断できる。以上の分析結果より，ポジティブ感情喚起条件，ネガティブ感情喚起条件ごとに中央値分割によって，社交性得点の高かった被験者を社交性有り群，社交性得点の低かった被験者を社交性無し群として割り当てた。なお群間で t 検定を行ったところ有意差が認められた（$t(58)=10.35$，$p<.01$；社交性高群（$M=30.83$)，社交性低群（$M=21.50$))。

比較方向の変数化と比較の度数

被験者の課題は，比較の相手としてA～Gの7人の中から1人を選ぶことであった。ここで，比較方向に関する先行研究での議論との共通枠組みを作り出すために，A～Cが選ばれた場合を上方比較，Dが選ばれた場合を同レベル比較，E～Gが選ばれた場合を下方比較として分類した。各比較方向ごとの比較度数は，上方比較（$n=28$)，同レベル比較（$n=25$)，下方比較（$n=7$）となった。特徴的であるのは，下方比較が報告される頻度が少なかった

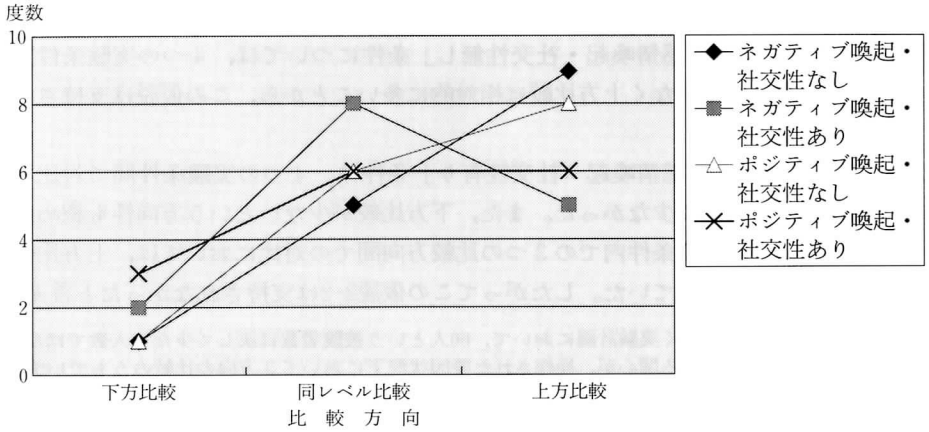

図4　実験要因ごとの比較方向

点である。次に実験操作要因ごとに，上方・同レベル・下方の各比較方向の度数を算出し図4に示した。なお比較方向に関するこの分析では，3つの比較方向ごとの頻度を従属変数としており，かつ，今回の実験研究では度数を対象とした統計的検定を実施するために十分な偏りのない度数分布を得ることはできなかった。そのため，度数を従属変数とした以下の分析においては統計的な検定は行わないことにした[7]。

仮説の検証

それでは本研究での仮説枠組みを対照しながら，得られた結果について検討しておこう。まずここで仮説について，「作業仮説」の形態として改めてまとめておくと，以下の4つの仮説が設定されている（表1参照のこと）。ここで，仮説1-1と仮説2-1は選択的プライミングモデルの検証となる仮説であり，一方，仮説1-2は下方比較理論の検証としての位置づけであった。また，これも上述したように，2つのモデルの対比という視点からは，ネガティブな感情状態下において，両モデルが直接的に相反する比較方向を予測している。

作業仮説1-1；ネガティブな感情喚起下では，社交性無し群において上方比較が多い。
〃　1-2；ネガティブな感情喚起下では，社交性有り群において下方比較が多い。
〃　2-1；ポジティブな感情喚起下では，社交性無し群において下方比較が多い。
〃　2-2；ポジティブな感情喚起下では，社交性有り群において上方比較が多い。

それでは各々の仮説の支持／不支持について検討していこう。

仮説1-1：「ネガティブ感情喚起・社交性無し」条件では，他の3条件に比べて最も上方比較が多かった。それゆえ，この仮説1-1は支持されたと言える。

仮説1-2：「ネガティブ感情喚起・社交性有り」条件では，他の3条件に比べて下方比較が多いとは言えなかった。ただしこの「ネガティブ感情喚起・社交性有り」条件では，他の条件に比して，上方比較が最も少なく，同レベル比較が最も多かった。また，各々の実験条件内での比較方向間での対比において，上方比較と同レベル比較の度数を比べたところ，4つの実験条件の中で，上方比較よりも同レベル比較の方が多い唯一の実験条件であった。ここで，上方比較が少なく，かつ上方比較に比して相対的に下方に位置する対象への同レベル比較が多くなっていることから，仮説2-1を支持する方向性を読みとることができる。

仮説2-1：「ポジティブ感情喚起・社交性無し」条件については，4つの実験条件間で比べたところ，下方比較は少なく上方比較は相対的に多いことから，この仮説は支持されなかったと判断できる。

仮説2-2：「ポジティブ感情喚起・社交性有り」条件は，4つの実験条件間で対比したところ，上方比較は相対的に少なかった。また，下方比較が少ないという方向性も認められなかった。さらに，この実験条件内での3つの比較方向間での対比においては，上方比較と同レベル比較が同数報告されていた。したがってこの仮説2-2は支持されなかったと言える。

註7）2×2要因配置にもとづく実験計画において，60人という被験者数は決して少ない人数ではない。ただし第1に，本研究での主たる関心が，操作された要因状況下において3方向の比較のうちでいずれの方向の比較がなされるかについてその度数を検討するものであったこと。そして第2に，今回，その3方向の比較頻度に結果として大きな偏りが生じたことが，分析を進めていく上において障害となってしまったことを認めなければならない。

また，以上を振り返って最も特徴的であった点は，「ネガティブ感情喚起・社交性有り」条件においてのみ，3つの比較方向のうちで同レベル比較がなされることが最も多く，このことと対照的に同実験条件において，上方比較がなされることが少なかったという点である。

［考　察］

まず仮説枠組み全体について，仮説の支持／不支持についてまとめておこう。なお以降では，要求特性への配慮の必要性から代替的に取り上げた，当該の比較側面（社交性）に関するパーソナリティ尺度得点を用いた作業仮説を，特性的な自信の有無というもともとの構成概念を用いた仮説形態に戻して論じていくことにする。「ネガティブな感情状態下では，自信の無い側面においては，上方比較が多く行われる」とする仮説1-1については支持を得た。また，「ネガティブな感情状態下では，自信の有る側面においては，下方比較が多く行われる」とする仮説1-2は，直接的には支持されなかったけれども，上方比較の回避という点において方向性としては支持された。このようにネガティブ感情状態下では，2つの仮説が少なくとも部分的な支持を得たと言える。一方，ポジティブ感情状態下での2つの仮説（仮説2-1，仮説2-2）については支持されなかった（この原因については後に考察する）。このようにネガティブ感情状態下においては，本研究での仮説枠組みが部分的な支持を得たことから，「喚起された感情状態」と「比較方向」との関係性において「自信」概念を媒介させることによって両モデルを統合することの有効性が一定の制限下で実証されたと言える。なお，既に論じてきたように，2つのモデルが相反する比較方向を直接的に予測しているのはネガティブ状態下における比較方向であった。それゆえに，本実験結果においてネガティブな感情状態下での仮説がともに少なくとも部分的な支持を得たことは，両モデルの統合という目的にかんがみて，その有効性評価を高めることに寄与すると言える。

下方比較の頻度

ここで，本研究では下方比較がなされることが少なかった点についてその原因を考察しておこう。この点については，真に下方比較が少なかったということを意味していると考えるに先だって，今回の実験状況の性質を考慮しておかなければならない。匿名下とは言え，他者に向けて自分が行った比較を報告するという課題の性質上，下方比較それ自体ではなく，下方比較の報告が抑制されていた可能性を認めなければならない。本研究での結果は，4つの実験条件を通じて下方比較の頻度は概して低いものであった。そしてこのことは，その原因が今回の実験設定の特徴に起因すべき要素があったことを推測させる。通常の社会的比較過程とは異なり，本実験では，与えられた条件下においていずれのタイプの比較を行ったかについて直接的に尋ねられている。もちろん，実験下での匿名性は保証されてはいるものの，一般的な社会通念に照らして決して肯定的な価値が付与されてはいない下方比較を行ったことを報告するのをためらう傾向性があった可能性は十分に考えられる。このことに加えて，今回の実験設定では，上方比較を行うということが高得点者の回答内容を参照することを意味していることから，模範的な回答を見たいという要素も合わせ持っていたことが上方比較を押し上げている影響関係を指摘できる。このように今回の実験設定では，下方比較を適切に検出することが全体的に困難であった慨然性が高いと考えられる。

ポジティブ感情での仮説の不支持

次に，ポジティブ感情を喚起された2条件ではともに仮説が支持されなかった理由について考察しておく必要があるだろう。まず，既に述べたように，操作チェックが有効であることは示されていることから，ポジティブ感情喚起自体は有効であったと判断できる。ただしここで，引き続いて行われた適性テスト得点のフィードバックが有する意味づけについて考えておかなければならない。社交性についての自己評価というものは程度の差こそあれ，誰しもが主観的にはそれなりの自信を持っていて，そのために，平均点付近である59点という得点は大部分の者にとって少々は不満であり，不快な結果である可能性が考えられる。そうであるならば，感情喚起操作の効果は，その操作手続きの最後になされた操作チェック段階までは有効に機能していたものの，その直後の得点フィードバック段階においてポジティブ感情を喚起する操作の効果を打ち消すように機能してしまい，その時点でその効果が消失してしまったのかもしれない。この点について検討するために，59点という自己の得点に対する評価指標に目を向けてみよう。「テストの得点をどう思うか（とても悪いと思う(1)～とてもいいと思う(7)の7件法）」という設問への回答結果を見てみると，喚起された感情状態の効果は見出されておらず（$t(58)=0.57$, $n.s.$），また各条件群の平均値はともに中点（4.0）よりも低い値を示していた（ネガティブ感情喚起群（$M=3.43$），ポジティブ感情喚起群（$M=3.27$））。自己の得点に対する受け取り方に差が無かったというこの結果は，適性テスト得点のフィードバックによって，ポジティブ感情喚起の操作が打ち消された可能性の傍証となる。

「自信の有無」概念の意味づけとその意義

比較側面に対する「自信の有無」という要因は，いかなる意味づけをもった概念と考えることが可能であろうか。比較側面に対して自信を有しているということは，慨然性として，この実験課題で与えられた適性テストという課題に対して，効力動機づけ（effectance motivation）をいだいていると考えることができる。「自信の有無」と類同した概念である効力動機づけ（effectance motivation）についてHarter（1982）は，内発的―外発的方向づけ，認知された有能さ，統制感という3つの観点から検討を行っている。その中で，本研究との関わりにおいて重要な側面として統制感に着目できよう。比較方向を決定する重要な要因のひとつとして統制感を想定することを通して，先に示したガン患者を対象とした研究結果を振り返ってみると，一見矛盾する研究結果を統一的に説明可能なように思われる。すなわち，下方比較理論を支持したTaylor, Wood. & Lichtman（1983）の研究においては，ガンという疾患に対して，「自分ではどうしようもないような現実事態を把握し受け入れる過程」という患者自身が統制不可能な側面にスポットライトをあてたものであると考えられる。その一方，ガン患者が上方の他者との比較・交流を志向したとするTaylor & Lobel（1989）の研究においては，同じくガンという病状についての比較ではあっても，「現実事態にいかにしてより良く取り組んでいこうかとする過程」すなわち被験者自身が統制可能だと考える視点から焦点をあてたものであると考えられる。さらに，このような比較過程は，主体的かつ前向きで適応的な過程であり，このような比較過程の生起を促進する要因について検討することは現実的な意義を有することにもなろう。本研究では比較側面に対する特性

的な自信の有無という構成概念に着目したけれども，（自信の有無と類似した要素を含み持っている）統制感・コントロール可能性の知覚が前面にあらわれた比較事態・比較状況を設定することで，より明確な結果が得られることが考えられうる。

下方比較理論の修正：自己高揚動機にガイドされた同レベル比較の存在

研究２より，下方比較自体が増加するという意味での下方比較理論の支持は得られなかった。ただし，上方比較が減少し，それに対応する形で同レベル比較が増加するという現象がポジティブ感情喚起・社交性有り群において示された。この結果は，下方比較理論を方向性として支持すると位置づけることが可能であり，実際，これまでの考察においてもそのように言及してきた。ただし今後検討していくべき課題として，上方比較の回避が２種類の帰結を導くということについて敏感になるべきであろうと思われる。すなわち，上方比較が回避され，それに応じて下方比較が増加するという帰結と，上方比較が回避されることが下方比較の増加には結びつかずに同レベル比較の増加に結びつくという２つの帰結である。これらの帰結は，その比較意図の点でも異なる内容が想定される。すなわち前者の帰結が，自己の自尊心が脅威にさらされた被験者が劣った他者の存在を確かめたり，劣った他者との比較を行うことを意図するのに対して，後者の帰結では，それが自分だけに起こったことではなく他にも同じような状況の者がいること（今回の実験状況に即して述べれば，同じような成績をとった者がいること）を確かめることにより自尊心を保ち安心しようと意図したと考えられる。このように考えると，これまでは下方比較理論を支持する研究知見として位置づけられてきた諸研究の中にも，下方比較が増加しているのではなく，上方比較が回避されて同レベルの他者との比較が増加したと解釈することの方が適切であると考えられる研究もある（例えば，Gibbons（1986），Smith & Insko（1987））。

それゆえ下方比較理論については，単に上方比較の回避という形態が存在していることをもって理論を支持する知見と見なすべきではないと言える。自尊心が脅威にさらされている状況で主観的幸福感を回復するために行う社会的比較という意味ではともに同等であるものの，親和動機を満足させるために同レベルの他者との間で行う比較と，自己の優位性を満足させるために自分よりも劣位の他者との間で行う比較という２つの別個のプロセスを考え，そして各々の比較過程を規定する要因について検討していく必要がある。そのさいに，同レベル比較によって自己高揚機能が満たされない場合（例えば，身近に同レベルの人がいない，もしくは同レベルの人とは同一視されたくないと考えるといったような場合）に，その次の手順として，下方に位置する他者との比較へ進むという関係性は十分に想定される。その点では，これらの２つの比較過程は，両者間に接点を有していると言える。

ここで，この２つの比較過程の機能について，比較理由の側面から検討を加えておこう。ここでは，自己高揚動機の程度量を測定するために設定された「自分の成績はそれほど悪くはないことを知るため」という比較理由項目に対する被験者の評定を従属変数として，喚起された感情（２条件）×比較方向（３条件）の２要因配置に基づいて各群ごとの平均値を算出した（表２：なおここでもデータ数の偏りを考慮して，分散分析は実施しなかった）。表２より，自己高揚動機が高かった条件は，ネガティブ感情喚起・下方比較条件と，ネガティブ感情喚起・同レベル比較条件の２条件であった。このことから，ネガティブ感情が喚起さ

れている状況下においては，下方比較のみならず，同レベル比較においても同等に自己高揚的機能があらわされていると言える。このことは，ネガティブ感情を喚起されている場合にその主観的幸福感を回復することを目指して下方比較を行うプロセス（ただし研究２で度数の点では支持されていない）と，同レベル比較を行うプロセスがともに存在しうることを示すデータと考えられる。

表２：自己高揚動機の肯定度（喚起された感情×比較方向）

	下方比較	同レベル比較	上方比較
ネガティブ感情喚起	2.00(1.73)	2.08(1.12)	1.64(1.08)
ポジティブ感情喚起	1.50(0.58)	1.42(0.67)	1.29(0.47)

（括弧内は標準偏差）

今後の検討課題

本実験では，主たる従属変数は評定平均値ではなく，いずれの比較方向にある他者を比較対象として選択するかについての度数データであった。そのために，ａ）従属変数に対する分析手法に制約があり，また，ｂ）１名の被験者から１データだけしか収集できないという制限を生み出した。比較対象について，複数の選択肢の中から１人だけを選んで回答するように求める本研究での測定方式は，社会的比較研究において一般的なものであるけれども，実際の社会的比較事態においては，さまざまな他者との比較を同時並行的に行っていることの方が多いのではないだろうか。それゆえ，比較対象を１名だけに限定せず，複数の対象に対する比較の程度量を連続量で測定する方式が考えられる。例えば，大きな意味づけをもって（この時，この意味づけの程度量をリッカート・タイプの尺度で測定する）上方の任意の他者との比較を行うことと並行して，相対的に小さな意味づけで下方に位置する任意の他者との比較を行った，というようにして比較事態を測定することで，評定平均値をその指標として採用する方法が考えられる。

また下方比較の回答・報告が回避されるという懸念に対応して，今後の課題としては，回答に及ぼす社会規範の影響力に対して十分な配慮を行う必要があるだろう。たとえるならば，偏見や社会的ステレオタイプについての個人的態度といったようなセンシティブな問題を検討する場合と同等な配慮を行った上で，下方比較について実証的に検討していく必要性があると言える。

さらに本実験においては，要求特性への配慮から，社交性の有り群／無し群が，慨然性として社交性に対する相対的な自信の有無に対応するという前提で研究を進めている。この点に関して，自信についてより直接的でより主観性の高い測度を用いた方が望ましかった可能性がある。実験内容に関する要求特性に十分な配慮を工夫した上で，より直接的な自信スコアーを測定し，変数化することは検討に値することだろう。

下方比較理論と選択的プライミングモデルは，互いに相反する結果予想を導くものではあるけれども，社会的比較過程を考えていく上で排他的な理論である必要は必ずしもない。各々の理論がそれぞれにその適用範囲を有しているならば，両者は両立しうることになる。本研究での２つの実証研究からは，この２つのモデルの共存関係について十全に明らかにすることはできなかったものの，少なくともネガティブ感情が喚起された状況に関しては，そ

の解明に向けた実証的知見の構築過程に寄与できたとは言えるだろう。

引用文献

Bower, G. H. 1991 Mood congruity of social judgments. In J. P. Forgas (Eds.), *Emotion and social judgments.* Pergamon Press. Pp. 31-53.

Bower, G. H. 1981 Mood and memory. *American Psychologist,* **36**, 129-148.

Cheek, J. M., & Buss, A. H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology,* **41**, 330-339.

Forgas, J. P., Bower, G. H., & Moylan, S. J. 1990 Praise or blame? Affective influences on attributions for achievement. *Journal of Personality and Social Psychology,* **59**, 809-819.

Gibbons, F. X. 1986 Social comparison and depression : Company's effect on misery. *Journal of Personality and Social Psychology,* **51**, 140-148.

Guiot, J. M. 1978 Some comments on social comparison processes. *Journal for the Theory of Social Behavior,* **8**, 29-43.

Harter, S. 1982 The perceived competence scale of childer. *Child development,* **53**, 87-97.

堀毛一也　1994 社会的スキルを測る　一人当たり良さ尺度　菊池章夫・堀毛一也（編）『社会的スキルの心理学』川島書店

Smith, R. H., & Insko, C. A. 1987 Social-comparison choice during ability evaluation : The effects of comparison pubulicity, performance feedback, and self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **13**, 111-122.

高田利武　1994　日常事態における社会的比較の様態　奈良大学紀要，**22**，201-210.

高田利武　1993　青年の自己概念形成と社会的比較　―日本人大学生にみられる特徴―　教育心理学研究，**41**，339-348.

高田利武　1992　『他者と比べる自分』　サイエンス社

Taylor, S. E., Wood, J. V., & Lichtman, R. R. 1983 It could be worse : Selictive evaluation as a response to victimization. *Journal of Social Issues,* **39**, 19-40.

Taylor, S. E., & Lobel, M. 1989 Social comparison activity under threat : Downward evaluation and upward contacts. *Psychological Review,* **96**, 569-575.

Wheeler, L., & Miyake, K. 1992 Social comparison in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology,* **62**, 760-773.

Wills, T. A. 1991 Similarity and self-esteem in downward comparison. In J. Suls & T. A. Wills (Eds.), *Social comparison : Contemporary theory and research* (pp.51-74). Hillsdale, NJ : Erlbaum.

Wills, T. A. 1981 Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulliten,* **90**, 245-271.

山本真理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，**30**，64-68.

Effects of Mood State and Self-Evaluation of Comparison Side on Social Comparison Direction : Toward Intergration of Downward Comparison Theory and Selective Priming Model

KIMIHIRO SHIOMURA and TOMOKO KOICHI
Department of Social Psychology,
Faculty of Arts, Shinshu University

ABSTRACT

A central problem in social comparison theory is determining what type of comparison will be performed in terms of direction (upward comparison, same-level comparison, downward comparison). Downward comparison theory and selective priming model make contrary predictions with regard to the relation between evoked mood state and comparison direction. When a negative mood is being evoked, downward comparison theory predicts that downward comparison will be performed, while the selective priming model predicts that upward comparison will be performed. Study 1 (subjects : 43 university students) collected data for social comparison in everyday life using the event-contingent self-recording method. Next, on the basis of the data so obtained, study 2 (subjects : 60 university students) applied the experimental method in an attempt to validate both of the above models in an integrated manner by employing the possession or lack of self confidence with respect to comparison side as a factor that mediates between evoked mood state and comparison direction. The experimental design in study 2 consisted of a 2-factor (2 × 2) model : evoked mood (positive mood, negative mood) × possession or lack of self confidence with respect to comparison side (confidence-possessing group, confidence-lacking group). Four hypotheses were proposed in conjunction with this design, and among these, the hypothesis that "in a negative mood state, comparison will be upward for a comparison side lacking self confidence" was supported by experimental results. In addition, despite the fact that no direct support was obtained for the hypothesis that "in a negative mood state, comparison will be downward for a comparison side possessing self confidence", there was support for directionality of this hypothesis in terms of avoiding upward comparison. In this way, partial support was obtained for a pair of hypotheses in a negative-invoked state. Finally, the validity of integrating these two models was demonstrated under fixed limits by applying the concept of self confidence as a mediating factor. Furthermore, as a modification to downward comparison theory, a function for satisfying self-enhancing motivation was discussed. Here, instead of making comparisons with other people of a lower level, comparisons are made on the basis of affiliation need with other people of the same level.

Keywords : social comparison, downward comparison theory, selective priming model, self confidence, mood state, event-contingent self-recording method.